

令和 7 年度第 2 回 立川市文化振興推進委員会 会議録

開催日時	令和 7 年 10 月 21 日（火曜日） 午後 2 時～4 時
開催場所	立川市役所 本庁舎 302 会議室
次第	<p>1. 委嘱状伝達、正副委員長選任 2. 報告</p> <p>立川市第 4 次文化振興計画 令和 6 年度の主な取り組み状況について 立川市第 5 次文化振興計画について</p>
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 立川市文化振興委員会 委員名簿</li> <li>● 立川市第 4 次文化振興計画 令和 6 年度の主な取り組み状況</li> <li>● 立川市第 4 次文化振興計画 成果指標</li> <li>● 立川市第 5 次文化振興計画の概要</li> <li>● 新編 立川市史</li> <li>● たちかわ物語 vol. 20</li> </ul>
出席者（敬称略）	<p>[委員]</p> <p>委員長 瀧川淳、副委員長 遠藤竜太、 宇治康、筧麻子、高木誠、戸野晴奈、堀江けんいち、松寄ゆかり、三浦康浩</p> <p>[事務局]</p> <p>文化スポーツ部長 奥野武司、地域文化課長 田中秀雄、市史編さん室長 白井貴幸、地域文化振興財団事務局長 足立香織、地域文化振興財団事務局次長 浅沼宏、地域文化課文化振興係長 稲福秀哉、地域文化課芸術支援戦略係長 加島信明、地域文化課文化振興係 坂内みちる</p>
公開及び非公開	公開
傍聴者数	0 人
会議結果	・第 4 次文化振興計画の取り組み状況について報告し、第 5 次文化振興計画の確認を行った。
担当	文化スポーツ部地域文化課 電話 042 - 506 - 0012

## 1. 委嘱状伝達、正副委員長選任

文化スポーツ部長より委嘱状の交付を行った。

委員長に瀧川淳委員が、副委員長に遠藤竜太委員が選出された。

## 2. 報告

立川市第4次文化振興計画 令和6年度の主な取り組み状況について

- 事務局より令和6年度の成果について資料2, 3をもとに報告した。

立川市第5次文化振興計画について

- 計画の概要、本市の課題について資料4をもとに事務局より説明があった
- 「取り組み方針2 はぐくむ ささえる」の部分の文化芸術活動の相談・支援体制の強化、についてと「取り組み方針4 つながる ひろがる」の部分の文化芸術コーディネーター(仮称)の検討についての部分が今回の計画で新たに盛り込まれた部分であると補足の説明があった。

### 主な発言

(サンクタス立川のギャラリーについて)

A委員：サンクタス立川のギャラリーの申し込みはどのようにすればいいですか。

財団事務局長：立川市地域文化振興財団に申請書がございますので、財団に足を運んでいただく必要がありますがそこから申請することができます。費用は無料です。

(市内の活動のつながりについて)

B委員：小学生のファーレ立川アート鑑賞教室において、デッキの上を小学生達が数名ごとにまわっているのをよく見ます。市内全小学校の5年生が参加しているということは、市内の小学生はみんな見ていることになり、これはすごいことだと感じます。ファーレ立川アートの案内をされている方について説明をお願いします。

足立：案内はファーレ俱楽部というボランティア団体が実施しています。年2回ワークショップや、アートの清掃活動もされています。

B委員：その団体の方はアートサポーター養成講座を受けられているのですか。

足立：ファーレ俱楽部メンバー全員がアートサポーター養成講座を受けているわけではありません。ファーレ俱楽部が独自でファーレ立川アートのガイド養成講座を実施していて、徐々にガイドを増やしているようです。

B委員：市の取り組みとアートサポーター養成講座のつながりがあると望ましいと思いました。

文化スポーツ部長：ファーレ俱楽部の活動もだいぶ長い歴史があって、その魅力を伝え続けている方々が活動されていること自体が、すごくありがたい状況だと感じています。伝える人が徐々に人が入れ替わっていく中、街を愛する思いや、作品に対して非常に魅力的に伝える技術はそのまま今後も引き継がれていく、そういういたきつかけの1つにアートサポーター養成講座があると望ましいと思います。

(取り組み3について)

B 委員：市内の小学5年生全員にファーレ立川アートに接する機会がありますが、同じように歴史民俗資料館に社会見学の一環として行くというはどうでしょうか。小学生や中学生全員が民俗資料館の映像資料を使って立川の歴史に接する機会があるといいと思います。

地域文化課長：今、立川市立の小中学校で立川市民科という授業が教科化されています。立川市のことを探る場を各学校が工夫して作っていて、各学校が地域の実態にあわせたかたちで立川市の歴史や文化を知るといった機会は作られていると考えています。

B 委員：ということは、授業内容はそれぞれの先生に任せているということですか。

地域文化課長：そうですね。より地域の実態にあった、子ども達にとっていいものといったかたちで、先生方が工夫をして実施しています。

B 委員：皆さんも子ども時代に、社会見学で清掃工場や最高裁判所を見学した記憶があると思います。そういう共通体験として歴史民俗資料館へ行った経験があると、文化に対する意識が今と比べて大きく変わることになるのではないかと思います。学校ごとに取り扱う内容が異なるものではなく、共通体験という観点で設定できるとより変化がわかりやすいかと思います。

文化スポーツ部長：ファーレ立川アートの鑑賞体験は、清水前市長の提言をきっかけに十数年やつており、成人している世代でも立川で小学生時代を過ごした子どもたちは、ファーレ立川アートへの認知が高くなっています。おっしゃっていただいた立川の歴史を知る機会の充実というと、歴史民俗資料館を見ていただくことで今の立川の歴史がすべて理解いただけようになってるかというと、課題があります。立川の歴史をご理解いただくには、立川市史が本として出来た後に、いかにわかりやすく本の内容を伝えていくかが重要になると感じています。本を購入した人にしか接する機会が無い状態にするのではなく、インターネット上でより分かりやすく解説したものを用意することや、立川市民科の授業の中で先生方が活用できる副読本のようなものを作っていくことを検討しています。

(取り組み方針4 つなげる ひろげる 補足)

A 委員：まちづくりダイアローグの1回目ではグリーンスプリングスや昭和記念公園といった会場

を提供する方々にお話しいただき、その後、地域で活動する方々でグループを作つてそれぞれテーマに基づいて対話をしていただきました。参加した方々のつながりが出来て、今度連携してこんなことやろう、ということが生まれていて、交流の促進がなされたことを感じています。もう1つが私の方でやっている立川ビルボートというサイトですが、SNSで市民ライターを募集していますが、大体月に1人ずつなりたいとお問い合わせをいただくようになっていて、人数もどんどん増えてきています。積極的に書いていただく方も増え、SNSの運用手伝いを申し出る方も出て、クオリティも上がっていい運用になってきたんですが、今度は予算が追い付かないというようになってきています。本年度分をセーブし始めてる段階で、自主財源もどうにかして獲得していく方法を考えいかなければならぬといけない、と新たな課題が出てきているような状況です。また、そういう発信が上手くいっているのか、先日は国立市の方でも文化芸術の同じようなサイト立ち上げたいと国立市の方から私と事務局の方でヒアリングを受けて、今後も情報交換をしていく、という話しあったので、隣の市にもいい発信できたと改めて感じました。

C 委員：私たちの団体はダイアローグに参加させていただいて、他のいろんな活動をされている方を知ることができたので、是非継続していただきたいと思っています。それと、ビルボードさんに丁寧に私たちの取材をしていただいて、発信された文章を見てすごく伝わったと感じることができました。予算の問題という話しが出ましたが、何とか継続していただきたいです。

#### （第4次計画の達成状況について）

委員長：令和6年度で目標値についてはおおむね達成できているが、達成できなかつたのは子どもや学生の参加に関わることで、少子化の影響は実感するところなので目標値の再設定は必要かもしれない。ファーレ立川アートツアーパートicipant数についてはインバウンドに目を向けるというのが、目標値を達成するひとつのきっかけになるのではないか。また、立川市は大きな都市なので、ダイアローグのような取り組みがないと、文化芸術団体がお互いを知る機会がなかなかないと思う。お互いを知ることによって新たな試みが生まれたりするので、ぜひ今後も継続してもらいたい。

#### （市史編さん室の課題 資料の保存について）

D 委員：今までの歴史を紙に残すというか、その紙をデジタル化して紙を捨てていいものなのかどうか、紙をなくす決断ができません。市史編さん室の取組を聞いていて、何かアイディアがあれば教えていただければと思います。

文化スポーツ部長：市役所の執務スペースが非常に狭くなってきており、資料の保管場所がどんどん無くなっています。来年あたりから既存の資料は業務用のスキャナーを買って、どんどんデジタル化して捨てられるものは捨てて、原本を残すことに意義があるというものはしっかりと見極めてそれは残していく予定です。会議の資料も紙の資料は一切なくしていく動きがありつつ、やはりどうしても紙で印刷する必要がある場面もあるので、そこは今併用して動いています。それとはまた別で市史編さんのどうしても残していかなければならない資料は新たな場所を確保する必要があるか、というのも含めた検討課題になっています。

D 委員：フラッシュメモリって何年もつんでしょうか。

文化スポーツ部長：物理のいわゆる利用が DVD になり、ブルーレイになり、フラッシュメモリになってきているが、それも技術が変わるとどんどん媒体が変わってしまうので、常に何らかの合理的な転換をして残していくということは今後もでてくるのではないか。

市史編さん室長：私ども市史編さん室もデジタル化を進めています。進めてはいますが、例えば、大隈重信直筆の手紙や原敬や歴代の首相のお手紙というものはデジタル化を進めるとともに現物を保管して永久に残していくかなければいけないと思っています。歴史上の人物のお宝が結構あるので、そういうものを永久に後世に残していくためにも保管場所が必要だと考えています。

文化スポーツ部長：どうしてもデジタル化をすべきものか原本で残していくべきものかを分別し、いかにまた貴重なものかということを語って伝える人が必要なのかなと思います。市史編さんの仕事自体は 10 年度まで本を発行してひと段落は付くが、組織が本を発行したあと残される課題にどう応えていくかが大きな仕事になると考えています。

市史編さん室長：各自治体の市史編さん事業は書籍に残すことが目的ではあるが、いかにその書籍を子ども達、あるいは中高生にわかりやすく伝えることができるか、までが役割であると職員は考えています。立川の旧石器時代から令和の時代までの分厚い本をコンパクトなポケット版の本にまとめて、それを小学生全員に配ったり、あるいはデジタルアーカイブとして子ども達がタブレットで見れるようなかたちにして、子ども達にもわかりやすいかたちにして歴史を伝えていくことも重要かと考えています。

D 委員：学校で持っているタブレットを使ってデジタル化された資料を学校の授業で見られるといいので、まとめてデジタル化する能力がある人が必要だと思います。そうやって授業で接することが出来ると大きく変わるとと思うので、そういう資料も今後作っていっていただければと思います。

文化スポーツ部長：デジタルアーカイブでこれまでの資料とともにライトな層に向けた資料、児童生徒版みたいなものは並行して整備していく必要性があるかと思います。本を作つて終わり、ではなくて、それをいかにわかりやすく伝えられるかということが引き続き課題かと思っていますし、市長以下やっていくべきだと力強いお言葉もいただいたので、そこは着実に進めていくことだと思います。

D 委員：今後やっていただければと思います。

(意見交換)

E 委員：収蔵庫問題ですが、次回以降の課題にもしていただきたいと思います。私どもの活動を凝縮した

展覧会が始まっております。多摩のあゆみという郷土機関紙を発刊して50周年を迎えることになりますて、そちらの記念展ということで開催しております。歴史資料室と美術資料室というところがありまして、今回2つが合体した展覧会で、歴史資料を皆さんにお見せする機会が中々なかつたので今回そういった美術品と合わせて皆さんに見ていただくような展覧会を開催しております。こちらはデジタルアーカイブでホームページからも見ることができる資料なんですが、現物を見ていただくというのも大切かと思いますので、お時間のある時にはご覧になっていただきたいと思います。

F委員：文化振興の推進は奥が深いなと感じました。芸術といったときに舞台など、表現に目を向けていたが、次に向けてもう少し絵の知識を深めてまいりたいなと思っております。一つ市史編さんとのことで質問ですが、たちかわ物語はどこで配っていますか。

市史編さん室長：歴史民俗資料館、学習館、図書館に置いてあります。

F委員：そうですか。拝見して、知識を深めようと思います。

委員長：デジタルアーカイブ化というのが第5次計画の柱となっていますが、アクセスしやすいところにまとまって見られるようになっているといいですね。

A委員：立川ビルボードを運営していると、実は周辺の自治体にお住いの方にかなり面白い取り組みをされている方がいることに気づかされ、市町村で分断されているなと一層感じています。文化芸術では広域連携が必須かなと思います。インバウンドについては周辺の自治体と連携をして、エリアとして人を呼び込んでいくような情報発信が今後も必要かなと思うので、次年度からやって行けたらと思います。

委員長：スポットではなくまちぐるみで、という視点がインバウンドには大事かと思います。

B委員：私は年間100本以上映画館で見ていて、あと落語、歌舞伎、芝居、音楽エンターテインメントにも時間を割いているのですが、その際に近隣市に行くことがあります。先日、ルネ小平で吹奏楽のイベントがあつた際に、「吹奏楽の小平」というキャッチフレーズがありました。立川もいろんな場面でキャッチフレーズのようなものを作つてみたいいのかなという感想を持ちました。ルネ小平で市内の吹奏楽をやってる子ども達が、プロのミュージシャンと一緒に合計300人くらいでステージに乗つていて、すごい音を出しているのを見ました。子ども達にとって貴重な経験だと思いますので、そういう観点でも第5次文化振興計画を実行に移すときにそういうことを気にかけていただければと感じます。

C委員：アール・ブリュットは主に障害のある人達のアートに出会つた感動を、多くの人に知つていただきたいという思いで始めたボランティア団体なのですが、10年続けていくと多くの人達に出会えて、いろんな方達が支えてくれて現在があります。今、たましんの地域貢献スペースで展示をさせていただいておりますが、何回か会場に行きますと、雨の日でも他の地域の方が足を運んできて下さったり、障害がある方を連れてきて下さったりしていて、たくさんの方が足を運んできて下さってるんだなと肌で感じ

することができます。もう1つ、アール・ブリュット高松からの風、というリーフレットにも載せさせていただいているが、高松学習館が主催していてイベントがありまして、こちらも地域の方達に足を運んでいただいます。ワークショップをやったり、今回は立飛のバンドさんとアール・ブリュットの作家さんによる音楽とアートのコラボをさせていただいたり、ワークショップもさせていただいております。障害福祉事業所にも展示をしていて、福祉事業所で活動している方は展示できる場所が身近にあるということを喜びとして活動を続けています。また誰かの作品が展示されていると周りの人に作品を作りたい気持ちを起こさせ、福祉事業所の中でもアートの活動が広がっていて、アートが身近にある大切さを感じる場所になっています。11年目になりますが、多くの人のおかげで今があります。また、2026年の1月17日から25日まで立川市地域文化振興財団が主催になるんですけども、RISURUを使ってアール・ブリュットの展示をすることになりますので、よかつたらお越しください。

委員長：立川の文化のキーワードの一つとして、アール・ブリュットはあるのではないかと思います。自分たちの活動に誇りをもって、ここまで継続していらっしゃるというのがとてもよく分かります。

D 委員：私はユースバレエを運営しているのですが、創立メンバーだった人がバレエの登竜門として1番規模の大きいYAGPのアジアの責任者になっていました。その女性がバレエコンクールの予選が立川であったため18年ぶりに帰ってきたようです。応募者が1,100名、その家族を含めるとものすごい人数が立川にきます。これも立川のまちづくりといいますか、世界に知つてもらういいきっかけになると思います。NHKでも紹介されました。立川はこれからどんどん変わっていくと思います。

G 委員：私の所属する石田倉庫のアトリエで「アートな2日間」を開催します。アトリエにいるメンバーの展示とその他にもライブ・飲食・ワークショップなどがあります。また、今年は立川文化芸術のまちづくり協議会とコラボして、アーティストによるトークイベントを実施したり、立川の映画祭で受賞をされた映画の上映をしたり、マーケットを開催して地域で活動されているクリエイターも呼ぶので、よかつたらぜひいらしてください。

副委員長：たちかわ創造舎のシアタープロジェクト、『ブレーメンの音楽隊』に関わっています。これまで何年か立川市の取り組みに多少関わっておりまして、アール・ブリュットさんが7年前に助成金を受けてから素晴らしい展開をする様子を拝見していましたし、すごくいい取り組みだなと思っています。立川市の文化振興の方向性はとても良いと思いますが、1点だけ自分の立場から意見を述べさせていただきます。助成金のようなパブリックな施策は、具体的な指標をもとに評価していくますが、美術、特にファインアートの世界はそういうもので計っていくと全く対象にすらならなくなると思います。要するに、ファインアートは、分からぬこととか新しいこととかそういったものが重要なので、それらをすくいあげていくことではじめて豊かな文化になると思います。ポピュラーな作品じゃないし、分からぬものもあるだろうけれど、もしかしたら専門的な目で見ると面白いとか優れているとかあるかもしれない、という視点があったなら、もっと豊かなバランスの取れた文化振興というものができていくのかなと思います。アール・ブリュットやたちかわ創造舎のように組織的にマネジメントできれば良いですが、マネジメントできないアーティストがいっぱい立川に住んでいて、おそらくもう自分でやるしかない

思っていると思うので、難しい問題だと思いますが、補助金なりで多少でもサポートできる仕組みを作つてあげると、個人のアーティストも育つのではないかなどと思います。ファインアートの価値は、すぐに評価が定まるものではなく公共性という観点からも測れない、という視点も持つていただけたらと思います。美術大学にはファインアート系学科とデザイン系学科があって、ファインアート系の学科というのは芸術性を追求するしかなくて、卒業後もそれぞれの芸術性を追求し続けている人達がサポートされたらもっと素晴らしいものになるのではないかでしょうか。その観点で作家を応援しているところはあまりないのですが、立川市はそうできたらいいなと思います。これから私自身もよく考えてみたいと思います。

委員長：事務局からの説明にもありました、これまでにもできることはやっていて、それが散逸している、点々としているといったところを、第5次計画でそれらをまとめて、わかりやすく発信していくとともにアクセスしやすくしていく。そういう中でデジタルテクノロジーの活用だと、文化芸術コーディネーターの検討といったところが課題になると思います。この場で皆様にご紹介いただいたようなイベントに足を運んでいただいて、肌で感じていただくということが今後の議論の材料になるのではないかと思います。また、たちかわ創造舎のシアタープロジェクト、『ブレーメンの音楽隊』には私も音楽ワークショップで関わっております。産学官連携での取り組みとして今後も継続していきたいと思います。国立音楽大学が来年度100周年を迎えます。様々なイベントを開催しておりますので、皆様にもぜひ足をお運びいただければと存じます。